

～ 日本海難防止協会シンガポール連絡事務所発SRO news ～
(Ref No : 25-015)

1 8月26日から29日までの間、パラオにて、入国管理に関する高度インテリジェンス研修が実施された。

本研修は、パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島の入国管理担当官を対象に、太平洋入国管理開発コミュニティ（PIDC）と国連薬物犯罪事務所（UNODC）が共催し、ニュージーランド移民局（INZ）の技術専門家の支援のもと実施された。

INZのHakili Matagi ICEの研修プログラムに基づき、入国管理情報の専門性、統率性の強化、不法入国の検知、対策、捜査、防止の支援、地域での情報共有支援を行うことで担当官の知識、能力の向上を図った。

国境における犯罪手口が巧妙化し続ける中、インテリジェンス活動の強化と機関間連携の向上は依然として最重要課題である。本研修は入国管理担当官が自信と正確性をもって国境警備にあたることのできる強靱なシステム構築に向けた重要な一歩となった。

[原文](#)

(29th August 2025, Island Times)

2 8月20日からニュージーランドにて、太平洋諸島警察長官会（PICP）の第52回年次会合が開催された。

太平洋地域の警察は、薬物犯罪、人身売買、強制送還、不法入国などに関する様々な法執行上の新たな課題に直面している。本会合では、懸念事項を聴取し、実行可能な解決策について議論が行われた。

[原文](#)

(28th August 2025, Islands Business)

[太平洋諸島警察長官会 \(PICP\)](#)

3 豪州のバーク内務大臣とナウルのアデアン大統領は、豪州の移民収容所に無期限収容されていた約350人の不法滞在外国人グループをナウルに強制送還し、定住させる代わりに4億800万豪ドルをナウル側に支払う覚書に秘密裏に署名した。継続的な再定住費用として毎年約7000万豪ドルを支払うことも約束された。今後30年間で総額約25億ドルの支払いとなる。覚書の詳細は公開されていない。

メンバーの多くが重大犯罪の前科を持つ同グループは「NZYQ コホート」と呼称されるが、これは2023年のオーストラリア高裁判決に由来する。同判決は、

強制送還の合理的見込みなく NZYQ コホートを移民収容することを違法と判断している。

今回の覚書の調印は、豪州政府が強制送還権限を強化する法案を国会に提出した動きに続くものである。本法案は、送還手続きの迅速化を目的としており、ナウルを含む第三国受入協定を締結している国への送還に際し、対象者の手続上の公平性を提供する義務である「自然正義 (Natural justice)」を撤廃するものである。これにより、対象者が送還先の国で死や拷問、迫害に直面すること、重要な医療を受けられないこと、家族と永久に離別することなどを考慮する必要がなくなる。

本法案に関し、バーク内務大臣は国会で、非市民が送還手続きの公平性を逆手にとって強制送還を頓挫させていると述べた。豪州政府は現在、NZYQ コホートの 3 人をナウルに強制送還しようとしているが、訴訟が続いており、プロセスは停滞している。

豪州の難民支援団体は、今回の覚書は透明性を欠いており、政府が提出した法案についても、広範な影響を及ぼし監視体制が欠如していると警鐘を鳴らしている。

[原文](#)

(30th August 2025, ABC)

[原文](#)

(3rd September 2025, Radio NZ)

[原文](#)

(4th September 2025, Radio NZ)

[原文](#)

(4th September 2025, PACNEWS)

4 中国の警察チームがソロモン諸島の遠隔地コミュニティを訪問し、「公開講座」と「中国武術の紹介」を行うとともに、1 万 2000NZ ドル以上の制服、日用品、文化・スポーツ用品を寄贈した。

ソロモン諸島警察によると、本訪問は中国とソロモン諸島の友好関係を強化し、警察協力を深めるものであるという。

[原文](#)

(4th September 2025, Radio NZ)

[原文](#)

(12th September 2025, Radio NZ)

5 8 月 29 日、トンガの Masefield 海軍基地において、豪州の太平洋海洋安全保障プログラム (PMSP) の下で供与される新たな揚陸艦「VOEA Late」の引渡式が行われた。

PMSP は、太平洋全域における海洋安全保障を強化するための 30 年にわたる豪州のコミットメントであり、ガーディアン級巡視船 24 隻の供与、揚陸艦 3 隻

の供与、主要なメンテナンス支援、アドバイザーの派遣、地域全体の航空監視、連携強化が含まれている。

[原文](#)

(2nd September 2025, Naval Today)

6 9月3日、鹿児島大学の練習船「かごしま丸」がパラオに寄港した。パラオ高校（PHS）の生徒たちとの文化交流や船内見学、訓練実演などが行われた。本寄港は両国の生徒たちにとって、海洋科学の知識醸成及び相互理解を促進する機会となった。

[原文](#)

(5th September 2025, Island Times)

7 月曜日（9月8日）、小島嶼国（SIS）グループの首脳は、第54回太平洋諸島フォーラム（PIF）首脳会議に向けた初会合を行い、信頼性の高い航空・海上輸送の確保、漁業開発の推進、保健システムの強化、気候変動対策資金へのアクセス改善といった喫緊の課題について議論した。

SIS グループはキリバス、パラオ、ツバル、ナウル、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島、ニウエで構成される。トンガも参加に関心を示している。PIFの中でも人口が少なく、気候変動、経済面の持続可能性、接続性など、地域で最も深刻な課題に直面している国々である。

議長であるキリバスのマーマウ大統領は、「本日の議論は、この場をはるかに超えた重みを持つ。PIF 首脳会議において SIS の存在感を形作り、パートナーや国際社会へのメッセージとなるであろう。」と述べた。

PIF のワンガ事務局長は、同事務局として SIS の取り組みを強力に支援していくことを確約すると述べた。

[原文](#)

(9th September 2025, Island Times)

[原文](#)

(8th September 2025, Islands Business)

8 太平洋共同体（SPC）の Minchin 事務局長は、ソロモン諸島で開催された海洋境界線の確定と 100%の海洋管理の推進に関するサイドイベントにおいて、「太平洋の8か国が国家海洋政策を採用しており、海洋境界の75%が条約により確定している。これは世界平均の60%を大きく上回るもので、太平洋地域は海洋外交の面で世界をリードしている。」と述べた。

また同氏は、「海洋境界線の確定は持続可能な漁業管理、深海鉱物資源への確実なアクセス、そしてブルーパシフィック大陸の100%海洋管理達成の基盤である。」と述べ、「未確定の境界線は安全保障を損ない、太平洋地域の気候変動レジリエンスを弱める。」と警告した。

[原文](#)

(10th September 2025, PACNEWS)

9 バヌアツのナパット首相は、同国を公式訪問中の豪州のアルバニー首相と共同記者会見し、両国が交渉中の「Nakamal 協定」について、バヌアツ政府は他のパートナーとの広範な関係性を損なうおそれのあるいかなる協定にも署名しないと述べた。

本協定は、豪州がバヌアツに対し、開発協力、気候変動、安全保障の優先事項について 10 年間で約 5 億ドルの資金提供を行い、開発パートナーとしての地位を強化するものである。

ナパット首相は、本協定の「重要なインフラ」に関する文言が署名を妨げていると語った。

アルバニー首相は、「協定の原則部分は既に合意している。私はナパット首相が必要とするプロセスを尊重しており、最終合意に達することができるものと確信している。」と述べた。

[原文](#)

(9th September 2025, VBTC)

[原文](#)

(12th September 2025, The Marshall Islands Journal)

10 太平洋諸島フォーラム (PIF) の地域構造見直し (RRA) は、「ブルーパシフィック大陸のための 2050 年戦略」を含む地域の優先事項を推進するうえで、ガバナンス構造が目的に適合したものであることを確認するプロセスである。その中で、南太平洋観光機構 (SPTO) は独立した単独の地域機関としての立場を維持する方針を確認した。

1983 年に設立された SPTO は、国連世界観光機関 (UNWTO) から世界的に認められ、その官民連携のガバナンス体制は包括的な意思決定を可能にし、持続可能な観光分野におけるリーダーシップを地域で高く評価されている。

同機構は、いかなる構造改革においてもその独立性が維持され、地域の経済、コミュニティ、文化を支え続ける観光の役割を強化すべきであると、太平洋の指導者たちに強く要請している。

[原文](#)

(9th September 2025, Fiji One News)

11 9 月 4 日、在マーシャルの相馬大使は、太平洋島嶼国 6 か国を対象に、国際移住機関 (IOM) と連携して実施した無償資金協力「太平洋島嶼国における感染症に対応するための国境管理能力向上計画」による可動式事務室ユニット、CCTV カメラ、手指洗浄台、可動式トイレをマーシャル諸島の保健・福祉省 (MOHHS)、港湾局、入国管理局などの主要機関に引き渡した。

今回の引渡しにより、マーシャル諸島の国境管理及び衛生管理の機能向上が期待される。

[原文](#)

(4th September 2025, 在マーシャル日本国大使館)

[原文](#)

(12th September 2025, The Marshall Islands Journal)

Friday, September 12, 2025 — The Marshall Islands Journal



Vanuatu deal unsigned

A landmark agreement to “transform” the relationship between Australia and Vanuatu remains unsigned, after Prime Minister Anthony Albanese held talks with his counterpart in Port Vila. The fate of the Nakamal Agreement now hangs in the balance, with Vanuatu’s Prime Minister Jotham Napat stating Tuesday that “wording” around

“critical infrastructure” in the agreement was holding back his country’s signature. Under the agreement, the federal government is expected to pour about \$500 million into Vanuatu over a decade to help fund key climate, security and economic priorities — while entrenching Australia’s position as a development partner. — **ABC Australia**

Handover of border control equipment

A major upgrade to four points of entry into the Marshall Islands has been accomplished, strengthening preparedness against infectious diseases.

The initiative supported by the government of Japan and the International Organization for Migration (IOM) partnered with multiple RMI agencies to provide

substantial improvements at four main entry points: Amata Kabua International Airport, Ebeye Seaport, Uliga Dock and Delap Dock.

Japan Ambassador Hirohisa Soma handed over border management and health control equipment to key partners at a ceremony last Thursday at Amata Kabua Inter-

Continued page 2

Office included in handover of equipment

From page 1

national Airport. Partnering with Japan and IOM are the Ministry of Health and Human Services, the RMI Ports Authority, and the Division of Immigration.

Representatives of each joined Ambassador Soma in speaking at Thursday's handover ceremony, including Hilary Vanderwey, Head of IOM Majuro Office, Edlen Anzures, Deputy Secretary of the MOHHS, Mercyba Balos, Director of Immigration, and Zoya Tayag, Deputy Director of the RMI Ports Authority.

The handover is part of Japan's assistance to the Project for "Strengthening Capacity of Border Control for Responding to Infectious Diseases in Pacific Island Countries" for the Republic of the Marshall Islands and six other Pacific Island countries in collaboration with IOM.

The equipment and facilities handed over are essential tools to improve border management and health control capacity at entry points. They include: One two-room modular office unit for health screening and immigration procedures for AKIA, 25 CCTV cameras for trace-tracking communicable diseases in AKIA, six hand washing stations for Uliga/Delap/Ebeye Docks), and one mobile toilet station for Delap Dock.

In addition, this project has provided equipment to enhance disease surveillance, emergency response and operational resilience. These include:

- An ambulance and health kiosks for rapid response and community health screening.

- Upgrades to the MIDAS system, including mobile diagnostic kits, passport scanners, and cybersecurity infrastructure for improved immigration processing and disease surveillance.

- Essential communication tools, sanitation equipment, air purifiers, surveillance systems and a dedicated two-room building to facilitate safe and efficient port operations.

At the ceremony, Ambassador SOMA reaffirmed Japan's commitment to developing resilient health systems for universal health coverage, as announced at the 10th Pacific Islands Leaders Meeting (PALM10) in July last year. He also commended the unwavering efforts of IOM staff to deliver the friendship from the Japanese people to the Marshallese people in a most timely and effective manner to strengthen the socio-economic resilience of the RMI to potential pandemic threats.

"IOM sincerely thanks project partners for their passionate and sustained engagement. This collaboration has been instrumental in bringing the project to a successful close," Vanderwey, the head of the IOM sub-office in Majuro. "These advancements will significantly enhance the Marshall Islands' capacity to detect, prevent and respond to health threats at its borders, ultimately safeguarding both residents and visitors."

The ceremony wrapped up with a ribbon cutting in front of the new kiosk facility that will be used for health and immigration screening.